

# 海外生活 だより

ロンドン事務所

## ロンドンの通勤から見える風景

(財)自治体国際化協会ロンドン事務所所長補佐  
大江 佑輝 (和歌山県派遣)

ロンドンでの生活が始まり、約1年が経過しようとしています。

赴任当初は言葉・文化の違いに戸惑いを感じながら、一日も早く慣れることに精いっぱいでした。ようやく生活が落ち着き、今あらためてロンドンでの日々の生活を見つめ直すと、生活のあらゆる場面で日本と異なる点が見えてきました。

今回は、そのなかでも、特に通勤時における筆者の経験を紹介し、そこから感じたことや考えたことをお伝えしたいと思います。

### ロンドンの地下鉄

私は通勤の際、地下鉄を利用しています。

ロンドンの地下鉄は、今から150年以上前の1863年にその一部が開通し、現



転落防止装置を備えた地下鉄の駅

在の地下鉄利用者数は年間延べ12億人を超え、有名な赤い2階建てバスと共に、ロンドン市内外で暮らす人々の生活の足として活躍しています。歴史ある地下鉄の駅がある一方で、転落防止装置を備えた最新のプラットホームがある駅など、新旧が混在しているのもロンドン地下鉄の特徴のひとつです。

世界で一番歴史あるこのロンドンの地下鉄を人々はどのように利用しているのでしょうか。

### 通勤者の朝のお供『Metro (メトロ)』

朝、地下鉄の駅に到着すると、人々は決められ

たようにある方向に向かっていきます。向かう先にあるのは、大量の新聞が積まれた専用ラックです。この新聞は『Metro



地下鉄駅構内に設けられたメトロ専用ラック

(以下、メトロ)』と呼ばれるフリーペーパーです。80ページを超えるこのメトロには、政治・経済・芸能・スポーツイベントなどあらゆる最新情報が掲載されています。

一方、こうした「メトロ」をはじめとするフリーペーパーの台頭や、インターネット上でニュースが容易に取得できるようになったこともあり、「タイムズ」や「ガーディアン」など歴史ある新聞は購読者の減少に悩んでいるようです。

日本と同様に車両内では、本を読む人、携帯電話を操作する人がいるなか、このメトロに熱心に目を通す人々の姿が見られます。降車駅が近づく



座席の背もたれの上に置き去られたメトロ

たものを自身が座っていた座席や背もたれの上などに無造作に置き去る人々もいます。

そして次にその座席に

座る人は、何事もなかったように、その置き去られたメトロを手に取り目を通し始めます。自身が読み終えたものを車内に放置することは、良いマナーとは思えませんでした。実際、読み終えられたメトロは、効果的にほかの乗客の手に渡り、うまく乗客の間で共有されていることに気が付きました。あまり日本では見ることができない光景のひとつではないでしょうか。

## すみません、もう少し詰めてもらっていいですか？

利用する地下鉄のラインにもよりますが、私が利用している地下鉄の通勤時間帯は非常に混雑します。地下鉄に乗り込む際にも、日本との違いがあります。それは比較的車両内に乗り込めるスペースがあるように見えても、すでに乗っている乗客が積極的に奥に詰めるケースは少ないということです。これから乗り込む乗客も無理にその電車に乗り込もうとすることはまれで、次の電車を待つというのがロンドンの一般的スタイルです。

日本だと、通勤時間帯では、なるべく全員が乗ることができるよう、体を縮めたり、体の向きを変えたり、時には片足が浮くような苦しい体勢で電車で揺られることもあるかと思いますが、ロンドンではそのような光景はあまり見られません。

## 何かとせっかち

車両が動き出しても日本の地下鉄とは少し様子が異なります。

車両に乗り込み、出発の態勢が整ったところで、プラットホームにいる駅員が、「Mind the doors」とアナウンスするや否や、ものすごいスピードでドアが閉まります。もちろん、ゆっくりと閉められる場合もあるのですが、容赦ないスピードでドアが閉められることが多いため、発車の際、ドア付近に乗っている場合は、注意する必要があります。このような状況であるため、駆け込み乗車はかなり危険です。

車両が動き出す瞬間にも注意が必要です。日本と比較して急発進が多く、カーブでの減速も十分

ではないため、車両内で立っている場合は、必ず手すりにつかまっておく必要があります。また、駅のホームに着く前に、急停車することもあります。その理由の多くは前の列車が駅を出発していないことによるものと考えられます。

無事駅に停車すると、ドアが開きます。ここで一番驚いたのは、車両が完全にストップする前に、ドアが開き始める場合があることです。日本だと完全に止まるまで、ドアが開くことなど、緊急事態を除いては皆無だと思いましたが、ロンドンでは割と頻繁に見かけます。

また地下鉄の出口まではエスカレーターが設置されているケースが多いのですが、エスカレーターのスピードは日本よりも断然速いです。最近では慣れてしまって、違和感はなくなりつつあるのですが、最初に乗った際は、かなりのスピードを感じました。

## 思いやり

通勤時に限った話ではないのですが、やはり、ここロンドンでは日本に比べてレディーファーストの精神が根付いているように感じます。高齢の方や、障害のある方、妊婦や小さいお子さんをお連れの方に席を譲るのは当然のことながら、女性に対して、男性が積極的に席を譲っている姿を頻繁に目撃します。また、駅構内にエスカレーターが存在しない場合など、率先して声を掛け、重いスーツケースなどを運んであげている姿もよく見かけます。

## おもてなしの心を大事に

海外での生活を通じて、日本の誇るべきところは何か？ということをよく意識し、考えるようになりました。それは美しい観光地や歴史・伝統、魅力的なコンテンツ、安心・安全であることなどと同時に、人々がおもてなしの心に溢れているということが挙げられるのではないかと思います。

日本が持つおもてなしの心をベースに、海外の習慣で良いと思われるところは大いに取り入れ、より素晴らしいおもてなしができる国になるよう、これからも日々考えていきたいと思っています。